慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	耳の証人, エドワード・ S・ モース : 明治, 日本の音風景と生活世界をめぐって
Sub Title	Earwitness : Edward Sylvester Morse : soundscape and life-world in the Meiji Japan
Author	山岸, 美穂(Yamagishi, Miho)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1991
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.33 (1991.) ,p.83- 90
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000033-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

耳の証人，エドワード・S・モース

——明治，日本の〈音風景〉と〈生活世界〉をめぐって——

Earwitness: Edward Sylvester Morse

—Soundscape and Life-world in the Meiji Japan—

山　岸　美　穂

Miho Yamagishi

In this paper I may describe *soundscape* which is experienced by Edward Sylvester Morse in his everyday life in Japan. An American zoologist Morse visited Japan three times in the Meiji Period.

Staying in Japan about two years and six months, Morse experienced Japanese everyday life and culture.

I think *trivial round of daily life* is the main theme of sociology. I am interested in *sociology of sound*, also in *sociology of music*. Sound-experiences are main sources of my sociological study of sound and music which is a branch of *sociology of everyday life*. Our life-world is filled with many various sound. Always we are surrounded by natural sound, human sound, mechanical sound, and music.

The word *soundscape* is coined by Canadian composer and musical educationalist R. Murray Schafer.

We must understand our *soundscape* because soundscape is not a background of our daily life but main stage of our daily life.

Morse is famous in Japan as a discoverer of Ohmori-Kaizuka ("shell mounds of Omori" by Morse) in Tokyo. I think he is not only an *eyewitness*, but also a notable *earwitness*. We can find an interesting case of sound-natural history in Morse's monograph of Japanese life.

私たちは日々，さまざまな音を耳にしながら生活している。世界は，自然音，人間音，機械音，〈音楽〉などで満ちている。人々は日常的体験によって構成される意味世界で生きているのだ。

私はそうした日々の暮らしにおける人々の音体験に注目し，そこから視点を広げていく社会学を構築していきたいと考えている。日常生活論としての「音の社会学」が私の構想している社会学なのである。

さて，私たちは日々，それらの音に何を感じながら生きているのだろう。音は世界理解，時代理解の一つの鍵なのだが，私たちはある音を心地よい音，好ましい音として感じとり，ある音には耳をふさごうとしている。また，時代の移り変りや生活様式の違いとともに，音の聴き方は変容してきたように思われる。

音は社会や文化とともにある。既に柳田國男は〈時代の音〉の存在に気づいていたし（『明治大正史　世相篇』），永井荷風はふけそめる夏の夜に橋板を踏む下駄の音，油紙で張った雨傘に門の時雨のはらはらと降りかかる響き，夕月をかすめて啼過ぎる雁の声，短夜の夢にふと聞く時鳥の声，雨の夕方，渡場の船を呼ぶ人の声，荷船の舵の響き，季節の変わり行くごとに，その季節に必要な品物を売りにきた行商人の声などが時代とともに消えていったことを，昭和 21 年に発表した「蟲の聲」において記している。また，〈サウンドスケープ（音風景）〉ということばを初めて概念化した R. マリー・シェーファーはそのグローバルで文明史的な著作 "The Tun

ing of the World"(『世界の調律　サウンドスケープとはなにか』)において，音風景の変容をハイファイなサウンドスケープからローファイなサウンドスケープへ，というかたちで捉えているし，エドワード・T・ホールは「アメリカのそれぞれの地域と町にはそれ固有の音楽とリズムがある」ということを『文化としての時間』において述べた。日々の生活を営むなかで人々は皆，音風景に社会や文化の様相を感じてきたのである。

それでは，明治時代，人々が耳にしていた音とはどのような音だったのだろう。音に何を感じていたのだろうか。

私は，人々が体験した音風景から，時代の〈様相〉や人々の日常生活を理解したいと思い，これまで，さまざまな人々の音体験をクローズアップさせながら，日本の近代化の過程，及びモダンの時代，ポスト・モダンの時代について考察してきたが[1]，ここでは日本の近代化を理解する際にまず注目に値する明治期に，3 回にわたり日本を訪れたエドワード・S・モースに注目することにより，〈明治，日本の音風景〉を照らしだし，そうすることによって，〈明治期〉の時代様相と人々の日常生活の様相の一端にアプローチしてみたい。モースは大森貝塚の発見者として広く知られているが，実はより広範囲な活動を行なっていた。路上の音，家のなかの音，さまざまな〈音楽〉など耳にした音をめぐり，実に興味深い叙述を残したモースの音体験を通して，当時の人々が耳にしていたのではないかと思われる音をクローズアップし，明治期の人々の日常生活や〈生活世界〉を浮かび上がらせてみたいのである。

1. エドワード・S・モース
—その人と業績—

モース (Edward Sylvester Morse, 1838-1925) は 1838 (天保 9) 年 6 月 18 日，アメリカ北東部ニューイングランド地方，メーン州の古い港町，ポートランドで生まれた。彼が腕足類の研究のために日本を初めて訪れたのは，明治 10 年 6 月 17 日，深夜のことであり，この時は同年 11 月 5 日まで滞在したのだった。第 2 回目の滞在は明治 11 年 4 月 23 日から明治 12 年 9 月 3 日までであり，第 3 回目の滞在は明治 15 年 6 月 4 日から明治 16 年 2 月 14 日に及んでいた。こうしてモースは延べ 2 年半ほど日本で暮らしたのである。そしてその間，北は北海道から南は九州，鹿児島まで，腕足類や貝塚などの研究をしたり，日本人の生活をつぶさに見たり，陶器や民具を集めることを目的として旅を行ったりするとともに，本業にあたるものだが，近代動物学の日本への移植，東京大学生物学会（現日本動物学会）の創設，進化論の紹介をはじめ，大森貝塚の発見・発掘，東大に進言しての日本最初の大学紀要の発刊，博物場の新設，大衆向けの科学講演等々，実に広範囲にわたる活動を行なったのだった。

さて，そうしたさまざまなモースの活動のうち，社会学において何よりも興味深いのは，彼が日本人の生活や日本の人々に対し，深い理解と関心を示し，日本についての注目さるべき著作を著した，ということである。私たちは，彼が帰国後まもなく，1886 (明治 19) 年に発表した "Japanese Homes and Their Surroundings"（邦訳は 2 種類あり，それぞれ『日本のすまい・内と外』『日本の住い』と題されている）や，1917 (大正 6) 年に発表された "Japan Day by Day"（『日本その日その日』）に当時の日本人の生活と心情を見ることができる。また，彼が収集したもので，現在，ボストン郊外のセイラム・ピーボディー博物館に収められている民具や写真，あるいは彼が収集し，現在ボストン美術館にその多くが寄贈されている日本の陶器に，当時の日本人の生活の姿を見ることができる。モースは，数多くの講演，著作，〈もの〉などを通してアメリカ，ひいては世界に日本を紹介した人物であったが，現代を生きる私たちに，開化まもない頃の人々の生活や心情を伝えてくれる人物でもあるのである。

「他国民を考察するばあい，可能なかぎり，かたよらないメガネをとおして，物事を見るようにすべきである。そして，おなじ誤謬をおかすにしても，くもった偏見レンズによる誤謬よりも，バラ色にそまったレンズをとおしてみる誤謬のほうが，まだましである」[2]。

モースはこうしたことを『日本のすまい・内と外』において述べている。私たちはここに日本を素直に理解しようとしたモースの態度を見ることができる。「先入観はすて，日本人の立場にたちかえって，日本人のつくったものを判断する必要がある」と感じたモース[3]。こうした欧米中心主義とは別個な立場は，当時日本を訪れた外国人のなかにあっては極めて珍しいことであったが，私たちがこれからクローズアップさせていくのは，そうした素直な心で受けとめられた日本の姿なのである。

2. 耳の証人，モースと音風景

冒頭において述べたように，ここでの主題はモースの日本での音体験である。モースと音，この組合せは一見したところ，意外なものに思われるかもしれない。しか

し，彼が人一倍音に敏感であったことを思えば，それはさほど不思議な組合せでもないのである。

彼がいかに音に敏感な人であったか。それは，彼がアメリカにおいて騒音防止運動に携わったという事実にも見ることができる。モースは，セーラムの自宅近くの貨物操車場から聞こえる汽笛の音，石畳の上を走る荷車の音，馬車の鉄輪のガラガラという音などに耐えることができず，1883（明治 16）年にマサチューセッツ鉄道委員会に公聴会を要望し，それを開催させて以来，騒音問題に関心を深めた。そして当時，大西洋岸から太平洋岸にわたって広がった騒音防止運動に参加し，自費でパンフレットをつくって配布するなどの活動を行い，1900（明治 23）年から 1912（明治 45）年の間に実に 16 編もの騒音防止のための記事とパンフレットを書いたのである。モースには，シンシナティのある豪壮な家に泊まった際に，部屋にあった置時計の音が眠れないほど気になった，という体験もある。また，ドロシー・G・ウェイマンが『エドワード・シルベスター・モース』において述べているように，モースは，若い時からピアノを奏し，合唱を楽しんだ人でもあったのである。

では，そのように音に深い関わりをもった彼が，日本の音風景に何を感じたのか。そのことに気をつけながら，モースの著作を読んでいくと，私たちは，思いのほかモースが音に関する記述を残していることに気づく。また，彼が日本から持ち帰り，現在セーラム・ピーボディー博物館に収められている〈もの〉のなかに，三味線，太鼓，琵琶，尺八，法螺貝などの楽器や，でんでん太鼓などの音の出るものが含まれていることに気づく。

感受性豊かな歴史家の場合でさえ，音に関する記述がほとんどなされていないことを指摘し，サウンドスケープ（音風景）研究にあたっては，最近の録音や分析の技術を用いていくとともに，サウンドスケープを歴史的に展望するためには，人類学や歴史の記録と並んで，文学や神話からとられた〈耳の証人〉(earwitness) の陳述にも耳を傾けなければならない，と述べたのは R. マリー・シェーファーだが，私たちがここで注目しているエドワード・S・モースも，「旅行の覚え書き」[1] の継続的記録のなかに音に関する記述を沢山に残している貴重な〈耳の証人〉だということができる。

明治という時代を〈身体〉全体で体験したモース。モースの著作に散見される音に関する記述を再構成することにより，明治，日本の音風景を旅してみることにしよう。

3. モースの音体験
—路上の音風景などをめぐって—

1877（明治 10）年 6 月 17 日，深夜。横浜に到着したモースが初めて耳にした音は，モースたちを乗せてきたサンフランシスコからの客船「シティ・オブ・トーキョー」号に横づけになり，彼らを岸まで運んだ小舟の漕ぎ手，3 人が発した不思議な吟り声であった。「ヘイ　ヘイチャ，ヘイヘイ　チャ」，舟を漕ぐのと同じ程度の力を籠めて彼らが唸る，時に変化する声は，まるで，蒸気機関が発するぜいぜいいう音にも似て聞こえたのである。モースは日本各地で舟歌を耳にしているが，そうした舟歌の類似性に気づいている。モースは瀬戸内海で，漁船の漁夫たちが夜間の安全を守るために吹く，貝殻の笛の音を耳にした。アメリカでは，漁夫たちはブリキの笛を吹いていたのである。

当時，路上で聞こえた音はどのような音だったのか。これからしばらく，路上の音風景に耳を傾けてみることにしよう。

「たいていの人は，粗末な木製のはき物をはいているが，これがまた固い道路の上で不思議な，よく響く音を立てる」[5]。

異国での最初の朝，朝食を済ませて横浜の街に出たモースの耳をまず捉えたのは，木製の履物（下駄）の音であった。カラコロ，カランコロン，ガラガラ，カタカタ…，モースは滞日中に，さまざまな足音に耳を傾けている。下駄のカラコロという音は，モースには「どこかしら馬が沢山橋を渡る時の音に似ている」「不思議に響き渡る」音楽的な振動が混じった音として感じられた。モースは 3 回目の滞日の際には，履物を見ればその家人の社会的地位を判断することができることに気づいたのである。

当時，路上を行き来していたのは歩く人ばかりではなかった。明治 3 年に許可がおりた人力車，人が引っぱったり押したりする二輪車，駅馬車，二頭立馬車，荷馬車，牛車，馬，牛，犬，鶏，駕籠など路上を行き来するものはさまざまだったが，モースが最も利用したものは何といっても人力車だった。

人力車。彼は最初，この車が人の力で走る，ということに屈辱感を感じている。しかしそれは瞬く間に「人力車に乗ることは絶え間なき愉快である」という感情に変わったのだった。モースは東京では人力車を月極めで雇っている。そしてその便利さを心ゆくまで味わったのだ。モースは車夫の強靱さに驚くとともに，その礼儀正

しさには感じ入っている。また彼は，人力車に乗っている間に車夫の声を聞いた。例えば浅草の「河開き」に向った際に全速力で走った車夫は，人々に路をあけさせる為に「ハイ，ハイ，ハイ」と叫び続けたし，仙台や岩国に向う際に乗った車夫もまるで狂人のように走り且つ叫んだという。熊本へ向った際には複数の車夫が全行程にわたり歌を歌い，交代に 1 人ずつ一足ごとに唸ったり調子を取ったりした。車夫は，客引きの声も激しかったのである。

他にどのような音が路上で耳に入ってきたのだろう。馬や牡牛のかわりに重い荷物を積んだ二輪車を引っぱったり押したりする男たちは，力を入れる時，かなり遠くまで聞こえる「ホイダ　ホイ！　ホイ　サカ　ホイ！」というような音を連続的に発したというし，駅馬車の御者は群衆の中を行く時，小さな喇叭を鳴らし，先に立って走る馬丁は奇怪極まりない叫び声をあげた。人力車や乗合馬車はできて間もなくであり，人々はそれをよける必要性を感じていなかった。だから，馬丁は馬の先を走って，人々に馬車が来たことを知らせる必要があった。駕籠は街道筋ではまだ活躍していた。彼らは「一種のヒョコヒョコした走り方をし，連続的に奇妙な，不平そうな声を立て」たという。モースの眼はまた，藁でつくった靴をはいた馬や牛が多いことにも注がれている。長崎の牡牛の腹脇には鈴をつけた長い紐がさがっていた。歩き廻るにつれて鳴るその音は，モースにジャランジャランというニューイングランドの揺の鈴を連想させたのである。

人々はどのような姿で路上に現われたのだろう。モースが路上で出会った人，家のなかにいても路上での気配が感じられた人には，ふつうに町を行き来する人をはじめ，ありとあらゆる種類の行商人，旅をする見せ物，固定式及び移動式の呼び売人，笛を吹きながらさまよい歩く盲目の男女，しゃがれた声と破れ三味線で歌って行く老婆と娘，一厘貰って家の前で祈禱をする禿頭の鈴を持った男，大声で笑う群衆に囲まれて話をする男など，多種多様な人々がいたが，その人々はそれぞれ異なる音風景を醸し出していたのだった。

まず行商人，及び呼び売人。モースが出会った物売り人には食物売り，花売り，バッタ売り，巡回図書館人，長い竹の管からあぶくを吹き出しその液を売る男，魚売り，煙管屋，ぶりき細工修繕屋，古道具屋，梯子売り，新聞屋，菓子の行商人などさまざまな人がいたが，彼らの姿や声に一つとして同じものはなかったのだった。例えば花売りの声。それは「死に瀕した牝鶏の鳴き声そのままである」とモースは述べている。バッタの行商人の売るバッタはアメリカに於ける同種のものよりもはるかに大きな音をさせて鳴き続けていたし，あぶくを吹き出しその液を売る男はあぶくを吹き吹き時々奇妙極まる叫び声をあげながら往来をのさのさ歩いていた。こどもを集めて菓子を売る人のなかには鳥や豚や家鴨や仔牛の叫び声を完全に真似する者がいたというし，新聞を配る男のなかには，一本の棒の末端に下げた箱に新聞を入れ，棒の他の端にある鈴を間断なくチリチリ鳴らしながら新聞を配り，配り終えると鈴を取り去ってしまう人がいた。物売りの姿を見ることができたのは東京だけに限らなかった。歩いて廻る床屋が往来で仕事をしているのを彼が見たのは，東京から宇都宮へと向う旅の途中だったし，小樽でモースが耳にしたのは，「日本の北方の国」（おそらく日本の本州，北端部と思われる：筆者注）から津軽海峡を越してきて夏の間，海岸に沿って住み，魚類を取引して町々で売って歩く，一種奇妙な魚売女の声だったのである。

昼夜を問わず聞こえる盲目の按摩の痛高い笛はモースには「哀れっぽい調子」で聞こえたし，夜中に聞こえる私設警察のカチンカチンという巡回の音は規則的なリズムをもってはいても奇妙に感じられた。江ノ島から神奈川に向う途中で見た夜廻りは 4 時であることを知らせるために太鼓を 4 つずつ叩きながら廻っていたし，室蘭の夜廻りのこどもは長さの異なる 3 枚の板を腰に結びつけていたために，一足ごとにカラン，カラン，カランと大きな音を立てた。巡礼の姿もさまざまであり，日光からの帰り道で出会った一人の巡礼は，首にかけた小さな太鼓を時々たたき，口を開くことなしに息を吹き出してしまったバッグパイプのような一種間のびしたつぶやくような曲節に似た音を立てていたし（モースは祈禱をこのように聞いたのである！），浜松の宿で出会った多数の巡礼（富士講）は「奇妙な踊」を踊り，おそらく富士山頂で行なわれることの下稽古として「脆き，禱り，歌を唄」っていた。モースが出会った見せ物や芸人も多岐にわたっている。手品師，音楽師，軽業師，話し家，人形を扱いながら歌を唄う人など。それらのなかには三味線をかきならして「恐ろしく罅（ひび）の入ったような震え声で歌いながら」家から家へと行く人もいたし，1 セントを貰って演技をした，竹竿の下端を口にあて息を吹き込んだり吸い出したりして，「一種奇妙な，ペコンペコンという音をたて」る男（この男は 3 人組で歩いていた）もいた。モースは，巡礼たちが多く行き来する江ノ島への路上で，寺の燈籠と思われる青銅の鋳物を運ぶ男たち

が休憩時に「奇妙きわまる詠歌みたいなもの」を唄うのも耳にしたし，火事の際に消防夫たちが町々を走りながら「猫のような叫び声」を出すのも聞いたのである。

ところでモースは人々が作業中に唄う歌にも心を留めている。例えば「不思議な人間の杭打機械」。横浜へ到着した日の朝，彼が見たのは運河の入口に新しい堤防を築いている，殆ど裸体の男たちなのだった。

「変な，単調な歌が唄われ，一節の終わりに揃って縄を引き，そこで突然縄をゆるめるので，錘はドサンと音をさせて墜ちる。すこしも錘をあげる努力をしないで歌を唄うのは，まことに莫迦らしい時間の浪費のように思われた」[6]。

日光では彼は捲揚機をまわして建築中の土台に大きな材木を運んでいる労働者たちが「お経のように響く妙な合唱」を「怒鳴る」のを耳にしたし，加賀屋敷（モースは加賀屋敷の一画に住んでいた）にいる際には家の後に天文観測所を建てる男たちがセメントをたたきこむ途中，「恐ろしく気味の悪い一種の歌」を歌うのを耳にした。

「如何に鋭い耳でも，二つの連続した音調を覚え込むことはできない」[7]。

しかし「我等の音譜ではどうしても現わし得ない」ものであっても，その歌は日本人が三味線や琵琶にあわせて歌う時に発する「唸り声」や「うなり声」に比べれば，よほど自然に心から出るもののように彼には思われたのである。

「日本人はどんな仕事をするのにも歌うらしく見える」[8]。

鉄道軌道を歩いている際，日本の労働者が地ならしをするのにシャベルや鉄棒の一振りごとに歌を歌うのに気がついたモースはこのように述べた。なお，彼は3回目の滞日の際には，杭打ちをする労働者の歌の意味を理解することができた。彼はヨイトマケと「地搗き歌」との関係に気づいたのである。

モースはこの他にも路上でさまざまな音を耳にしている。市の音，太鼓，三味線，笛，鈴，仮舞台・仮小屋での無言劇，二輪車の上で太鼓を叩き，「蟻のように群れ」笑い叫ぶこどもたちの声，提灯や華蓋の大行列，花火，人々の歓声などの祭日・祭礼の音，日光で聞いた「日本の詩人が礼賛してやまぬ一種の鳥の，玄妙な笛のような声」や蟬の声，水音高く流れる川の音など，また，冬になれば「クリック，クリック，クリック」という羽子板の音や紙風の「製材所を思わせるような，大きな，ブンブンいう音」等々。しかしながらモースが述べているように「薄い建築と，家々の開放的な性質」のために全ての物音が戸外へ聞こえやすく，路上に居ながらにして家々からの音を聞くことができたこともまた，モースが体験した音風景の大きな特徴なのであった。

モースは本郷の通りでは，金箔を打ちのばす「不思議にガラガラいう音」や男が「トントン」と魚をきざむのを耳にしたし，北日本のある村では，ぬるでの一種の種子から取得する植物蠟をつくりつつある人々が木の槌を叩く際に立てる大きな音に耳を傾けた。加賀屋敷から大学に通う際に毎日通る町では，端の家から順に，三味線か琴かを伴奏としたキーキー声，こどもたちが漢字を習い，絶叫する声，誰かが漢文を読み，その読声に誰かが感心して立てる「お経を読むような，まだるい音声」が聞こえたし，江ノ島の旅籠屋や遊興の場が並ぶ通りで聞こえたのは，「妙な泣くような」客引きの声や，「ヒンヒン啼き」の客引きの声だった。大阪で彼は，米の取引場の近くで「奇妙な人の叫び声の混合」を耳にしている。仲買人や投機人たちの騒々しい群が，「身振りをしたり，手を振りあげたり，声をかぎりと叫んだり」している光景がそこで展開されていたのである。

「間口がすっかり開いて，すべての活動を，完全にさらけ出していた」店々。家屋は冬になってもあけっぱなしであったという。提灯屋，菓子屋，樽屋，大工，建具屋，鍛冶屋，印形屋など，さまざまな種類の変わった看板を出したありとあらゆる職業が並ぶ町。

「どこへ行っても，都会の町々の騒音の中に，律動的な物音があるのに気がつく」[9] とモースは述べている。「働く時は唸ったり歌ったりするが」，「その仕事が，叩いたり，棒や匙でかき廻したり，その他の一様の運動である時」，その仕事を音調と律動をもって行なう人々。彼は，鍛冶屋の手伝いが使用する金槌はそれぞれ異なる音色を出すので気持ちのよい音が連続して聞こえ，4人の者が間拍子を取って叩くと，それは「鐘の一組が鳴っているよう」だ，と述べている。「労働の辛さを，気持ちのよい音か拍子で軽める」人々。モースはそこに「面白い国民性」を感じたのである。

ところで，当時，東京では火事が多く，モースはしばしば火事場に姿を見せ，そこでいろいろな音を体験した。東京市中のいたる所に警鐘が設置されていたのだが，その音は，モースのことばを用いるならば，「粗硬で非音楽的で」500フィートも届くまいと思われるほど莫迦げて弱い音だったのである。

赤ん坊の叫び声が極めてまれな物音であることもモースが気づいた日本の音風景の特徴であった。赤ん坊はい

つも母親や子守の背中にあり，揺籃が使われることもなく一人で放り出されてもいなかった。モースはこどもの遊びにも興味を抱いていた。こどもがいつも大人たちの身近に置かれ，かつ見守られているのに気づいたモースは，日本を「子供達の天国」として理解したのである。

モースはまた，日本人は，指でコツコツしたり，口笛を吹いたり，手に持っている物をガタガタさせたりしない，「物静かな落着いた人々である」と述べている。

ところで，当時，新文明の音が全くなかったわけではない。例えば「不思議な有様の町を歩いていて，アメリカ製のミシンがカチカチいっているのを聞くと妙な気がする」[10] とモースは述べている。モースは支那に見られる甚だしい保守主義とは異なる，日本人の素早い順応性に気づいたのである。また，3 回目の滞日の際に彼は銀座と日本橋が鉄道馬車建設のために掘り返されるのを見ているし（鉄道馬車は明治 15 年 6 月に新橋～日本橋間が開通し，同年 10 月には上野，浅草まで開通した），人力車や乗合馬車の音が当時の人々にとって，新文明の音であることも，確かなことなのだった。式典などの折りに軍楽隊が屋外でも西洋音楽を奏すこともあった。そしてそれも日本の人々にとっては新しい響きだったのである。

しかし，当時の日本にはまだ江戸の音や香りがそこここに残っていた。人間的な音やリズムや声に溢れ，路上の音と屋内からの音とが交錯する町。行商人によっても季節が告げられていたし，夜廻りや火事の際の警鐘によって〈音響共同体〉(acoustic community) が形成されていた[11]。モースが加賀屋敷で毎日感じていたように，夜になれば，淋しい位の「完全な平和と静寂」を体験することもできたのである。

銀座を除いては歩道がなく，「歩調をそろえて歩く，ということを決してしない」人々が道路の真ん中にまで群れて出た当時の日本で，〈耳の証人〉モースは，「蜂がうなるような話声」を耳にしつつ，好奇心に心を踊らせながら，「正直で」「きれい好きで」「自然を愛する」人々が営む市井の生活を見て歩いていたのである。

4. モースと日本の日常生活

モースはこの他にもさまざまな音を耳にしている。函館の砂浜で耳にした，番人が時を打ったり，巡警の時間を知らせたり，火事の時に，猛烈に叩いたりするのに使用する，木製の「面白い音響信号の仕掛」の音，函館近辺の石像のところで見た，「祈禱柱」についている廻すとジャラジャラ鳴る鉄の環がいくつかついた鉄の車（後生車）の音，劇場や学校の音風景，三井の絹店で聞いた，販売方と出納方との間の金銭の取次をする小さなこどもたちの「奇妙な，長く引っ張った叫声」，さまざまな国のことば，台風や地震の音，加賀屋敷で耳にしていた，鳥の鳴声，鼠が馳け廻る音，床の「パリンパリン」という音など。また彼が，何回か訪れた浅草で体験したのは，賽銭箱に絶え間なく銭が投げ込まれる様子や見せ物や市の音だったし，モースが陶器収集の師と仰いだ蜷川の葬儀の際に聞いたのは，僧侶の「棹歌のように聞え」るつぶやきや，鐃鈸（ぎょうはつ）の「ガチャンガチャン」という音だったのである。モースは，劇場の幕を揚げる時に使われる拍子木，学校の授業の終わりの合図，夜番の拍子木，庭園内の小さな家に茶の湯に行くことを知らせるために使う，木の槌で叩く木の板など，日本人が木でつくった装置をいろいろな用途に使用することを，日本人の特徴として挙げている。また彼は，日本とアメリカの鐘のつき方が違うことに気づいていた。「日本の鐘音がかくも美しいのは，我々のように内側にぶら下る重い金属製の鐘舌で叩かず，外側から，吊しかけた木製の棒の柔らかく打ち耗らされた一端で打つからである」[12] とモースは述べたのである。

モースが聞いた音楽も多岐にわたっていた。笛，太鼓，三味線，琵琶，琴などの合奏から，義太夫，雅楽，導入されて間もない西洋音楽まで。こうしたモースの音楽体験について詳細に述べることは別稿に譲りたいが，ここでは 1 点だけ記しておきたい。それは，モースが浅草の梅若氏のところで謡を習った，という事実である。楽譜なしの諳誦による稽古，発声など，モースはさまざまな困難を体験している。また彼は，謡は唱歌ではなく，ヨークシャの田舎者の会話に似た，抑揚のある朗誦である，と感じていた。それでもモースは，実際に稽古をするなかから，それまでは彼にとって違和感のあった，日本の音楽の長所を見出すことを期待して，謡を習い続けたのである。

外国人は日本の音楽を理解できず，むしろそれを笑い，また，国家は西洋音楽の導入に懸命であった当時，こうした日本の音楽へのアプローチのしかたは，極めて特異なことだったということができる。モースの日本理解のしかたが卓越していたことは，こうしたところからも窺えるのである。

家のなかで聞こえた音はどのような音だったのか。モースが指摘した日本の住居の特徴は，既に述べたように家の「開放性」と「親密性」にあった。開放性とは，室内に間仕切り壁がないことや，庭と室内の連続性がある

ことを指し，親しみやすさは，住宅の規模や室内装飾の豊かさ，それに竹を多用する建築材料の性格によるものだった。こうした住居の特徴がモースの音体験に影響を与えたのである。例えばモースは江ノ島の茶屋で，召使いを呼ぶ普通の方法が手をたたくことだ，ということに気づいている。これは，家が明け放しであるために，合図が台所まで聞こえたのだ。

モースは，襖の開閉の際に全く音がしない，ということ，畳の上を歩く時にも，猫のような軽やかさで，静かに歩くことができる，ということを例に挙げて，日本の住まいは神経をやわらげる効果をもっている，と述べている。しかし，雨戸は彼にとって「騒音源」なのだった。明け方，モースは，奉公人が雨戸を戸袋にしまいこむ時の音でしばしば起こされている。モースが述べているように，旅館では，雨戸のガタガタという音が，ベルやドラのかわりを果たしたのである。

モースは，呼び鈴がない時，外の人は鎧戸の間から部屋の中の人に声をかけることがあることに気づいたし，アメリカの住居では全ての開口部に錠やカンヌキ，自動監視装置がついているのに対し，日本で夜間に施錠をするのは雨戸だけであることにも気づいていた。モースが理解するところでは，日本の住居にはプライバシーが欠けていた。しかし彼は，多くの西洋人のように，そのことを非難せず，むしろ，プライバシーがなければ社会生活を維持することができない西洋社会の野蛮さを問題にしたのである。

路上で家々からの音を聞いたのと同様に，彼は，家のなかで屋外からの音を耳にしている。例えばモースが京都の旅館で耳にしたのは，僧侶たちが祈禱の時に出す「昆虫の羽音と容易に区別しがたい」音や，歌声や琴の音だったし，加賀屋敷で聞いたのは，按摩の笛や，遠くから聞こえてくる「酒に酔って，景気のよくなった男の歌う，調子の高い音」だった。

モースが日本の住居を全て同じように理解したのではないことにも，ふれておかなければならないだろう。例えば東京の町家の露地の更に奥の清楚な庭に関し，モースは次のように述べている。

「ほこりっぽくて，そうぞうしい表通りから，一歩このひなびた庭にはいると，そこには，静かな田園生活の喜びがある」[13]。

モースはこうした場所を，居住空間の秘所として理解していたのである。

結局，人間にとって音とは何なのだろう。モースが素晴らしいのは，彼が，何気ない日常の音にまでも耳を傾け，そうした音を記述してくれたところにある。私たちは，モースの音体験をクローズアップさせることにより，今ではその片鱗すらないような，〈時代の音〉に耳を傾けることができた。そして，それだけでなく，私たちは，音を通して，モースが体験した日本の文化を理解することができたし，〈明治期〉の人々の日常生活や〈生活世界〉にアプローチすることもできたのである。

モース自身が気づいていたように，当時の日本では既に大きな変化が起き，更にまだいろいろと変化しつつあった。しかし，人々の暮らしには，人間的な音やリズム，人々が唄う歌が溢れていた。季節が変われば人々が体験する音にも変化が見られたし，音によってつくりだされるコミュニティがあったのである。路上の音と屋内の音が交錯する空間があり，音によって人々の存在が感じ取られるような空間があった。仕事や労働は歌やリズムとともにあったし，人々の声は実に抑揚に満ちていた。自然や人間の音が機械的な音に勝っていた空間が人々によって体験されていたのである。

私たちが生きている世界は音ばかりの世界ではない。しかし，音によってかたちづくられる現実感，音によって意味づけられる世界，音によって構築されるコスモス，音とともにあるコミュニティがあるのである。音に気づく時，音のなかへ入っていく時，音によって包まれる時，人々は，自分たちが生きている生活世界を豊かな広がりにおいて理解することができる。音は人間の日常的存在の不可欠な構成要素なのであり，人々はさまざまな音において，いろいろな音を通して，互いに固有の現実と世界のうちに自らを見出すことができるのである。

社会学の一つの課題は，私たちが生きている世界をできるだけ深く理解する，ということにある。私は，人々の音体験を通して，私たちが生きている世界にアプローチし続けたい，と思う。そのためにも私は，モースのような〈耳の証人〉に注目し，多くの耳の証人のことばに耳を傾けることにより，時代時代に深く根をおろした〈音の博物誌〉をつくり，そうした作業を通じて，私たちが生きている時代を照射してみたいと思うのである。

それにしても，モースは，なぜ，こんなにも詳細にわたって，音に関する記述を残すことになったのだろう。それは，彼が異国の日常生活を体験したことによるのだろう。「異なる文化に属する人々は，ちがう言語をしゃべれるだけでなく，おそらくもっと重要なことには，ちがう感覚世界に住んでいる」[14] とホールが述べていることに注目したい。こうしたことからも，モースが雨戸を

「騒音源」として見なしていたことに眼を向けてみる必要があるだろう。しかしそれとともに，モースが，音に敏感な人であったこと，音に耳を傾ける心をもっていたこと，博物学の心をもって，日本で身辺に心を配っていたことが，モースがこれだけの音の記録を残すことができた理由ではないかと私は思う。

近年，横浜の西鶴屋橋を初めとして，日本の各地で，音を改めて発見し，それぞれの立場から〈世界の調律〉を考えてもらうことを目的としたサウンドスケープ・デザインが行われるようになり，また，行政の側でも，その地域の〈音名所〉を募集する試みが行われるようになって，私たちの身のまわりの音に耳を傾ける機会が増えてきた[15]。また，音風景研究の輪も次第に広がりつつある。しかしこれまで，音風景の研究が全く行われてこなかったわけではない。音風景研究の先駆者の一人として，〈時代の音〉の存在に気づいていた柳田國男を挙げたいが，私は，エドワード・S・モースを，音風景を記録した注目さるべき人物ということができるように思うのである。

ここで，モースが慶應義塾に招かれていることを記しておきたい。明治 12 年 7 月 11 日，モースは，フェノロサ等とともに来塾し，進化論の講義を行っている。その時，彼は，学生たちが柔術や剣術を行うのを目にして，「ピシャンピシャン」という竹刀が響きわたる音を聞いたのである。

モースは明治 10 年 6 月 19 日，初めて横浜から新橋に向かう時，汽車の車窓から，大森の貝塚を発見している。モースは素晴らしい〈目の証人〉として私たちの前に姿を見せる。だが，彼は目の証人にすぎないのではない。本稿において明らかになったように，モースは〈明治期〉の音の記録，という点において，間違いなく〈耳の証人〉といえる人なのである。

今日，私たちが体験している音風景は，モースが体験したものとは大きく異なっているが，私たちは歴史のなかの音にも注目しながら，身のまわりの音に改めて耳を傾け，今日の時代状況や生活世界，自らの存在を一層深く理解するようにしたいものだ。〈音風景〉を通して，日常性，人々の生活空間，生活時間，人々の生き方や存在の仕方，時代や文化が浮かび上がってくるのである。音に託した人々のさまざまな思いや感情があるように私には思われるのである。

注

1) 山岸美穂「音空間と音風景—東京の変遷と耳の記憶—」山岸健編『日常生活の舞台と光景［社会学］の視点』聖文社，1990 年，及び，山岸美穂「音風景と日常生活—時代の〈様相〉という視点から—」(1990 年度慶應義塾大学大学院社会学研究科修士論文)，を参照。
ここではモースの音体験を主題化しているが，日本では彼の音体験についてこれまで若干，言及されたケースが見られる。

2) エドワード・S・モース『日本のすまい・内と外』上田篤他訳，鹿島出版会，1979 年，21 ページ。

3) 同書，65 ページ。

4) モースは "Japan Day by Day" の執筆過程について，「やむを得ず，私は旅行の覚え書きを一篇の継続的記録として発表することにした」，と述べている。モースの日本での日記は，彼によれば 3500 ページにも及んでいたのである (E・S・モース『日本その日その日 1』石川欣一訳，平凡社，東洋文庫 171，1970年，「緒言」を参照)。

5) モース，前掲『日本その日その日 1』5 ページ。

6) 同書，5-6 ページ。

7) E・S・モース『日本その日その日 2』石川欣一訳，平凡社，東洋文庫 172，1970 年，94ページ。

8) 同書，222 ページ。

9) E・S・モース『日本その日その日 3』石川欣一訳，平凡社，東洋文庫 179，1971 年，113 ページ。

10) モース，前掲『日本その日その日 1』30 ページ。

11) 〈音響共同体〉とは，R. マリー・シェーファーのことばで，「音響的に定義および規定された共同体」を表す。シェーファーは，共同体は，政治的，地理的，宗教的，社会的存在としてさまざまに定義されるが，理想的な共同体は，聴覚的にも定義され得る，と述べるのである。教会の鐘の到達範囲によって規定された「教区」は〈音響共同体〉の典型的な例である。また，シェーファーによれば，歴史を通じて，人間の声の到達範囲は，集落を決定する際の重要なモデュールとなってきたのである。詳細は，R.マリー・シェーファー『世界の調律　サウンドスケープとはなにか』鳥越けい子他訳，平凡社，1986 年，を参照。また，山岸美穂，修士論文においても検討が行われている。

12) モース，前掲『日本その日その日 1』68 ページ。

13) モース，前掲『日本のすまい・内と外』，86ページ。

14) エドワード・ホール『かくれた次元』日高敏隆他訳，みすず書房，1970 年 (原著出版 1966 年)，5 ページ。

15) 名古屋市や練馬区において〈音名所〉募集の試みが行われている。サウンドスケープ・デザインの詳細及びその意義などについては，山岸美穂，修士論文，第 3 部「エッフェル塔と西鶴屋橋—モダン，ポスト・モダンをめぐって—」及び，第 4 部「音風景の射程と地平—いくつかの事例を糸口として—」を参照のこと。